

(二〇一九年度)

6 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は22ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一 次のA、Bを読んで、後の間に答えよ。

A

ここで近代科学の方法論としての仮説演繹法の内容に立ち入る前に、演繹法と帰納法のそれぞれの長所と短所について考察しておこう。演繹法(Deduction)とは、普遍的命題(前提)から個別的命題(結論)を論理的に導き出す方法である。その典型は数学における論証、とりわけ幾何学的証明(たとえば、ユークリッドの『原論』)の中に見ることができ。つまり、一群の公理(前提、普遍的命題)から一つ一つステップを踏んで個々の定理(結論、個別的命題)を導き出すという手続きが演繹法にほかならない。演繹法の特徴は、前提(公理)が結論(定理)を必然的に(例外なく)帰結することにある。それゆえ、前提が正しければ、結論は必ず正しい。しかし、結論は前提のうちすでに暗示的に含まれていたものを明示的に取り出したものにすぎず、演繹法によって知識を拡張すること、すなわち新しい知識を獲得することはできない。

このような演繹法に対して、アリストテレスは他方の帰納法を「帰納は個々のものどもから一般的なものへの上昇の道である」と定式化している。つまり、帰納法(Induction)とは個別的命題(前提)から普遍的命題(結論)を導き出す論証のことである。演繹法とは反対に、帰納法は知識を拡張することはできるが、前提と結論との関係は必然的ではなく、蓋然的(確率的)なものにとどまる。この点を一つの事例で考えてみよう。

たとえば「カラスAは黒い」「カラスBは黒い」……「カラスZは黒い」という有限個の観察事実(前提)から、「すべてのカラスは黒い」という普遍的法則(結論)を導き出す帰納的論証を取り上げよう。この結論「すべてのカラスは黒い」は全称命題(すべてのSはPである)という形の命題であり、そこには過去・現在・未来のあらゆるカラス(無限個)が含まれている。すると、前提となる観察事実は有限個であるのに対し、結論として導出された普遍的法則は無有限個のカラスに言及しているのであるから、前提と結論の間には有限から無限への推論という³「X」が存在することになる。つまり、この論証は将来においてどこかで「白いカラス」が発見される可能性を完全に排除することはできない。それゆえ帰納的論証の結論は必然的ではな

く、一定の確率でその法則が成立するという蓋然的な主張にとどまるのである。

このことを捉えて、帰納法が妥当な論証ではないことを指摘したのは、イギリスの哲学者D・ヒュームであった。彼は「Aが起ればBが起る」という帰納法に基づく因果的知識には正当な根拠はなく、原因と結果の結びつきは両者の「空間的近接」、「時間的継起」および「恒常的連接」に基づいて形成されたわれわれの「心の習慣」にすぎないものと考えた。科学理論を構築する基盤である帰納法が蓋然的な結論しかもたらさないということから、ヒュームは科学知識の確実性を疑い、最終的には懷疑論に達したのである。

しかし、科学研究の現場では帰納法なしで済ますわけにはいかないし、また科学が経験科学である限り、数学や論理学など形式科学のように、演繹的論証のみに頼ることはできない。したがって、帰納法が演繹法と同じ程度の確実性をもちえないとしても、少なくとも十分信頼するに足る科学の方法であることを哲学者たちは示そうと試みてきた。その代表者がJ・S・ミルである。彼は帰納法を支える原理または公理として「自然の経路の斉一性(the uniformity of the course of nature)」を提唱した。これは、「ひとたび生じたことは、十分に類似した状況のもとでは再び生じ、再びどころか同じ状況が繰り返されるたびごとに生じるであろう」ということを意味する。つまり、自然界を観察して同じような状況のもとで一定の現象が生じれば、それ以後も将来にわたって何度も繰り返されると考えてよい、という原理である。この原理に基づけば、自然は統一ある秩序によって支配されているのだから、帰納法は十分に信頼できる妥当な結論を導く、という保証が与えられることになる。

しかし、この「自然の斉一性」がア・プリオリ(経験に先立つ)な原理だとすれば、それは経験科学の方法とは言えず、一種の形而上学的原理となるほかはない。他方、もし経験的原理だとすれば、その正しさは帰納法によって論証されねばならず、「帰納法の妥当性を保証する自然の斉一性の正しさを論証するために帰納法を必要とする」とこととなって「Y」に陥る。

このようにして、論証方法としての帰納法の正しさを根拠づけることは、「帰納法の正当化」の問題として多くの哲学者が挑戦してきたが、残念ながらも成功はしなかった。

B

十九世紀になると、ジョン・ハーシェルが『自然哲学研究に関する予備的考察』(一八三〇年)において仮説演繹法を明確な形で定式化するにいたる。彼の言葉を借りれば、「科学的探究が成功を収める過程では、帰納的方法と演繹的方法の双方を交互に使用することが絶えず求められている」のである。その後、W・ヒューエルやW・ジエヴォンズらによってさらに洗練されていった仮説演繹法は、今日では以下のようなステップを踏むものと考えられている。

- (1) 観察に基づいた問題の発見
- (2) 問題を解決する仮説の提起
- (3) 仮説からのテスト命題(予測)の演繹
- (4) テスト命題の実験的検証または反証
- (5) テストの結果に基づく仮説の受容、修正または放棄

明らかに、(1)から(2)へいたる過程では帰納法が、(2)から(3)へいたる過程では演繹法が用いられている。このようにして仮説演繹法は帰納法と演繹法とを組み合わせて両者の欠陥を補い、さらに演繹のもつ比重を高めることによって、帰納法のもつ不確かさをある程度まで補正することができた。しかし、仮説演繹法といえども有限回のテストを通じて仮説を確立する方法である限り、そこで得られた一般法則は、やはり蓋然性を免れるわけにはいかない。それは、一定の確率で法則が成り立つことを保証するにとどまるのである。

だが考えてみれば、自然科学が経験科学である以上、それが常に「新しい経験」に対して開かれているのは当然のことである。9 仮説は、たとえそれが実験的に検証されたとしても、修正を免れた絶対的真理の資格を獲得するわけではない。予測のつかない新たな経験によって仮説が反証される可能性は常に残っているのである。それゆえ、自然科学の法則に数学や論理学と同等の論理的必然性を求めることは無いものねだりと言わねばならない。その意味で、科学理論や科学法則は永遠に「仮説」の身分にとどまるのであり、それは常に経験的テストによる修正や廃棄の可能性に身をさらしているのである。

〈注〉 D・ヒューム：スコットランド出身の哲学者(一七一―一七七六)。 J・S・ミル：イギリスの哲学者(一八〇六―

一八七三)。 ジョン・ハーシェル：イギリスの天文学者(一七九二―一八七二)。 W・ヒューエル：イギリスの哲学者

(一七九四―一八六六)。 W・ジェヴォンズ：イギリスの経済学者、論理学者(一八三五―一八八二)。

問一 傍線部1および本文の説明に基づいて、次の推論の中から演繹法を用いた推論を二つ選べ。

a 今までに調べた三角形の内角の和は全て一八〇度であった。したがって、三角形の内角の和はどのような三角形でも全て一八〇度である。

b その本屋で今までに買った本は全て面白かった。したがって、その本屋で次に買う本も面白いだろう。

c 三角形の内角の和は、どのような三角形でも全て一八〇度である。したがって、いま調べている三角形の内角の和も一八〇度である。

d カラスAは黒い。カラスBも黒い。カラスCも黒い。したがって、全てのカラスは黒い。

e 全ての人間はいつか死ぬ。ソクラテスは人間である。したがって、ソクラテスはいつか死ぬ。

問二 傍線部2のような結論がなぜ出てくるのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 演繹法は、幾何学的証明にのみ必要な一群の公理から個々の定理を導き出すという手続きにすぎないから。

b 演繹法は、一つ一つステップを踏んで個々の結論を導き出すにあたって前提との関係が必然的でないから。

c 演繹法は、無限個の普遍的命題を一つ一つステップを踏んで有限個の観察事実から導き出す手続きにすぎないから。

d 演繹法は、前提となつている普遍的命題の中にすでに含まれている内容を論理的に導き出すにすぎないから。

問三 文中の空欄「X」³に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 演繹的矛盾
- b 帰納的飛躍
- c 幾何学的証明
- d 観察的事実

問四 傍線部4について、なぜヒュームは科学知識の確実性を疑ったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 演繹法によって知識を拡張し新しい知識を獲得することはできず、普遍的命題は論理的に導き出すしかないから。
- b 帰納法は知識の拡張はできるが、その結果得られる個別的命題は蓋然的であり、論理的に導き出すことができないから。

- c 帰納法に基づく因果的知識には正当な根拠がなく、原因と結果の結びつきはわれわれの「心の習慣」にすぎないから。
- d 「帰納法の正当化」の問題に過去の多くの哲学者が挑戦してきたにもかかわらず、いずれも成功はしなかったから。

問五 傍線部5について、なぜ科学研究の現場では帰納法なしで済ますわけにはいかないのか。その理由としてもっとも適切な

なものを次の中から一つ選べ。

- a 「空間的近接」、「時間的継起」などに基つて形成されたわれわれの「心の習慣」だけでは科学として不十分だから。
- b 演繹法だけでは知識を拡張して新しい知識を獲得することはできず、知識の拡張のためには帰納法が必要だから。
- c 普遍的命題から個別的命題を必然的に導き出す演繹法だけでは、蓋然的主張を論理的に導くことができないから。
- d アリストテレスが「帰納は個々のものどもから一般的なものへの上昇の道である」と公理として定式化しているから。

問六 傍線部6の「自然の斉一性」とは簡単に言うところのどのような考えか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 自然はどのような条件下でも同一の現象が将来にわたって一斉に生じるようにできているという考え。
- b 自然における現象は、一定の確率で法則が成立するという蓋然的結論を支持しているという考え。
- c 自然においては現象が一樣に生じているので、公理としての帰納的論証が妥当な結論を導くという考え。
- d 自然は統一ある秩序に支配されていて、同じような条件の下では一定の現象が生じるという考え。

問七 文中の空欄

「 Y 」

に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 循環論法
- b 論理矛盾
- c 三段論法
- d 試行錯誤

問八 傍線部8で述べられていることを明確に述べ直すようになるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 観察によって発見された問題を解決するための仮説の提起を帰納法によって必然的に導く。そして、その仮説から蓋然的に成立するテスト命題(予測)を演繹法によって論理的に導き出す。

b 観察によって発見された問題を解決するために帰納法を用いて蓋然的な仮説を立てる。そして、その仮説から演繹法によって新しい知識(予測)を獲得するための論証を行う。

c 観察によって発見された問題を解決するために帰納法によって普遍的な仮説を立てる。そして、その普遍的な仮説(普遍的命題)から個別的テスト命題(予測)を演繹法によって論理的に導き出す。

d 観察によって発見された問題を解決するために帰納法によって普遍的命題から個別的命題(仮説)を導き出す。そして、その個別的命題をテスト命題(予測)として演繹法によって導き出す。

問九 傍線部9で述べられていることの趣旨は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 仮説演繹法における仮説は、演繹によって論理的に導き出された個別的命題であり、たとえそれが実験的に検証されても、予測のつかない新たな経験によって得られる普遍的命題とは言えないということ。

b 自然科学(経験科学)における仮説は、数学や論理学の定理がもつ論理的必然性はず、たとえそれが実験的に検証されても、予測のつかない新たな経験によって修正・反証される可能性が常に残っているということ。

c 仮説演繹法は帰納法と演繹法とを組み合わせて両者の欠陥を補った方法であり、数学や論理学の定理に対しても、予測のつかない新たな経験によって修正・反証される可能性を常に残しているということ。

d 自然科学(経験科学)における仮説演繹法は、演繹のもつ比重を高めることによって、帰納法の不確かさを補正することができたので、実験による検証は絶対的真理の資格の獲得のためには不必要であるということ。

問十 本文の内容と合致しないものを次の中から二つ選べ。

- a 「自然の斉一性」によって「帰納法の正当化」の問題は解決することができる。
- b 仮説演繹法によって帰納法の不確かさがある程度まで補正することができる。
- c 自然科学の法則に数学などと同等の論理的必然性を求めるのは原理的に誤りである。
- d 演繹法は知識を拡張することができないので、科学の方法としては望ましくない。
- e 帰納的論証の結論には必然性は保証されず、常に蓋然的な主張にとどまる。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

吾人は自己を指して直に『人』と云ふこと能はざる也。何となれば是れ只だ或は男たり、或は女たるに過ぎざれば也。若し吾人一個を指して強ひて『人』と言はんと欲せば、宜しく呼んで『半人』と言ふべきのみ。故に吾人の第一の希望は、我が『半人』を尋ねて之と廻り合ひ、以て『全人』を完成せんことに在り、而して吾人が稍々長じて心裡無限の寂寞を悲み、転輾反側して熱涙滂沱たるの時は、是れ即ち吾人が始めて我が『半人』の不具を自覚したるの時にして、古来言ひ慣らして之を『恋愛』と呼ぶ也。尊貴なる哉恋愛や。吾人が恋愛の痛苦に、胸廓の張り裂けんかと悩むの夜半は、天父が其の両刃の利刀を以て、愛子の心に他の半人の活像を、彫刻し給ふの時なることを深謝せざるべからず。

教育の秘訣は、各人をして自己の自覚を得せしむるに在る也。故に吾人をして赤裸々に所信を表白することを得せしめよ。³人類教育の第一義は、恋愛の真旨を理解せしむるに在る也。苟も一び其の真旨の一端を解得し、其の神聖尊貴にして之を軽忽にすべからざる所以を首肯せんか、他の仁義道德の如きは、従て自ら発明するを得ん。豈に復た修身修身と苦心慘憺たるを要せんや。怪しむべき哉、古今の教育なるものや。其の末葉に走つて却て其の根幹を忘却せるもの、滔々として皆な然らざるは無き也。豈に畜に之を忘却せるのみならんや、却て恋愛の恥づべき罪惡なることを教へて、強て之を遠離せんと努むる也。恰も春の野に萌え出づる若草に向て、其の罪を鳴らさんとするもの如し。ああ是れ何等の無分別ぞや。試に家庭に就て之を看よ。父母が苦心經營する所のものは、其の少嬢の婚礼仕度に非ずや。女学校に就て之を看よ。其の標榜する所は則ち、良妻賢母の養成に非ずや。然れ共家庭に於ても、学校に於ても、吾人は恋愛の真旨聖義を教へて、其の萌ゆる若草に適順の発達を遂げしむべき教育の準備あることを見ざる也。而して社会は却て青年男女が恋に悩み、恋を語るものに向て、石を投ぜんとす。此の如くにして青年男女は、其の生命たる『恋愛』の大問題を解釈せんが為めに、父母と教師と総ゆる人目とを避けて、苦悶独学するの外なからんとす。其の誤つて邪路に迷ふもの多くして算ふるに堪へざる、寧ろ当然の結果に非ずや。

吾人が恋愛の神聖を信ずるは、是に依て吾人が始めて『半人』の不具を脱して、『全人』の完成を實にすることを得るが為めなり。故に吾人は又た恋愛の自由を尊重せざるべからず。看よ、恋愛の秘義を蹂躪せる非自然の社会制度より胚胎する、罪惡の如何に恐るべきかを。家系の維持の為に、財産の繼承の為に、階級の制限の為に、而して富の分配の不公平の為に、蹂躪せられたる恋愛の自由の残骸は、余りに世人の耳目に慣熟して、今は既に其の悲惨てふ感覺をさへ麻痺するに至れり。只だ多情多恨の詩人あり、詩歌に小説に之を謳うて、其の覺醒を促さんと欲するあるのみ。

夫の往々にして『恋愛』の自由と聞きて、悚然戰慄する道德先生の如きは、未だ恋愛の意義と、先生自家の職分とを理解せざるものなり。知らずや、恋愛を自由ならしめんが為めには、先づ恋愛を高調ならしめざるべからず。而して之を高調ならしむるは、則ち教育の第一義にして、實に道德先生の職分なることを。故に彼の互に其の『半人』を求めつつある金釧と海老茶袴とが、得て恋愛に失敗する所以の者、必竟其の無教育の結果にして、其の第一の責任は則ち是れが教育を無視する、欠陥の社会に在り。

恋愛の教育なく、其の智識なき結果は、多くの才子佳人をして結婚後の失望に陥らしむ。吾人は固より結婚に依りて直に恋愛を成就したるものに非ず。結婚は是れ只だ恋愛發展の一段階なるのみ。之に依て吾人の恋愛は一層の試煉に遭遇す。公等試に思へ、一佳人の満身の熱誠を捧げて公等を愛慕することあらんには、彼の佳人は必ず公等を以て正義高潔なる理想の丈夫と敬慕するならんも、公等自ら反省せば、決して佳人の想する如き偉男兒に非ずして、其の言ふ所は必ずしも思ふ所に非ず、汚念醜情常に心に来往して、赧然其座に堪へざるものあるを發見せん。男兒に在りて然り、女子に在りて独り然らざることを得んや。故に恋愛上の無教育者たる才子佳人は、結婚の後に於て、相互に敬慕の誤謬を發見して琴瑟遂に和すること能はざるもの、挙げて數ふべからざる也。現実の妻は未だ決して理想の婦人たるべからず。現実の夫は未だ直に理想の男子たるべからず。其の互に理想を『半人』に求むることに於て自己の向上發展を成就し、其の汚醜なるもの漸く消えて、日に光明の新境に進むことを得ん。此の如くにして恋愛は真に永生の目的なり。死して尚ほ止まざるの事業なり。吾人は貞女両夫に見えざるの幽玄を思ふ。而して貞男また両婦に見えざることの、同じく幽玄なる所以を信ぜずんばあらず。彼の世間既に恋愛の

自由を否認し、而して又た再嫁再婚を拒絶するが如きは、共に是れ恋愛の敵にして、実に人生の逆賊也。

故に恋愛は年と共に衰ふるものに非ずして、却て愈々濃厚且つ清聖に進むべき也。恋愛は人生をして縦に永世と無限ならしめ、横に社会と同体ならしむ。恋愛の活動する時、白頭尚ほ常に青春の歡喜あり。恋愛の断滅したる所、花顏既に魔鬼の啾々を聞く。若し世に恋愛を外にして宗教を説き、道徳を説き、社会の改革を説き、世界の平和を説くものあるも、吾人は之を評して、龍を画きて其の睛を点ぜざるの類と言はんとなす。

(木下尚江「恋愛と教育」)

〔注〕吾人…われわれ

心裡…心の裏。心の中

天父…キリスト教の神

軽忽…軽はずみなふるまい

少嬢…少女

慣熟…物事に慣れて上達すること

悚然…恐れてぞつとするさま

公等…あなたがた

丈夫…立派な男子

赧然…恥じて赤面するさま

琴瑟…夫婦間の愛情のたとえ

花顏…花のように美しい顔

啾々…しくしく小声で泣くさま

問一 傍線部1について、「半人」と言ふべきなのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人は男と女とによって構成されており、個人は人の半分しか受けもっていないから。
- b 恋愛感情を抱く他者と遭遇しなければ、個人は人として完全とは言えないから。
- c 人が恋愛をするときはまず苦しみ悲しむものであるので、個人は恋愛の一面しか享受していないから。
- d 人は心理・感情と行為・行動の面とをもっており、その二面が連動して働くことはめったにないから。

問二 傍線部2のように筆者が考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 恋愛は、男と女がめぐり合うという、神秘的なものを含みもっているから。
- b 恋愛は、苦しみのたうちまわるほどつらいものであり、それに耐えることで神聖さが宿るから。
- c 恋愛は、半人であることを自覚した者どうしが営む謙虚なものであるから。
- d 恋愛は、神が人の心に愛する人の姿を刻みつけてくれるものであるから。

問三 傍線部3のように筆者が考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 恋愛の真旨を理解すれば、自然に他の道徳が身についてゆくから。
- b 恋愛の真旨を理解すれば、教育の秘訣である自己を自覚させることができるから。
- c 恋愛の真旨を理解することによって、古い道徳を乗り越えてゆけるから。
- d 恋愛の真旨を理解することによって、教育の基本である他人を尊ぶ力が身につくから。

問四 傍線部4について、筆者は何を以て「怪しむべき哉」と言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 古今の教育が可能性のある才能の芽を摘んでしまっていること。
- b 古今の教育が枝葉末節にこだわって根幹をおろそかにしていること。
- c 古今の教育に仁義道德といった伝統的な価値観が欠落していること。
- d 古今の教育に恋愛が含みもつ罪意識への理解がないこと。

問五 傍線部5について、このように批判されている「道德先生」は、ではどのようにすべきなのか。筆者の考えに該当するものを次の中から一つ選べ。

- a 恋愛に失敗した人に対して同情を寄せる。
- b 男女の恋愛を手助けしてあたたかく見守る。
- c 恋愛の自由という観念を広めることに努める。
- d 恋愛の気運を高めることに力を尽くす。

問六 傍線部6は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 貴婦人
- b 乙女
- c 美人
- d 淑女
- e 女学生

問七 傍線部7のように筆者が考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 結婚は新たな試練の始まりであり、そこにおいて、はじめて半人の自覚のもとに理想を目指すことになるから。
- b 結婚は恋愛発展の一段階であり、結婚生活の苦闘を乗り越えて老境に至ってはじめて完成するものであるから。
- c 結婚してもお互いは理想的な人物ではなく、努力しないと新しい境地に達することはできないから。
- d 結婚してもお互いの性格は簡単には一致するものではなく、熱誠をもって愛を育んでゆかねばならないから。

問八 傍線部8の言に当てはまるものを、次の中から一つ選べ。

- a 恋愛は年齢を重ねるにつれて深くかつ清くなつてゆくはずである。
- b 恋愛は継続させてゆけば社会とよい折り合いをつくり上げてゆくものである。
- c 恋愛は年齢を重ねるに従つて逆に青春を感じさせてくれるものである。
- d 恋愛は継続させてゆけば道徳や宗教に匹敵する力を発揮するものである。

問九 傍線部9はどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 貞淑な女性が二人の夫をもたないのは、倫理感の強い証拠でありすばらしいと思う。
- b 貞節な女性が二人の夫に仕えないということは、理想的ではあるが疑問にも思う。
- c 貞操の堅い女性が、二人の男性と関係を結ばないことは、あたりまえだが優れたことと思う。
- d 貞潔な女性が、二人の男性と会うことをしないのは、慎重すぎて不思議だと思う。

問十 傍線部10はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a ものに対して軽重をつける感度がない
- b 物事を大まかに見ている細部がわかっていない
- c ものの見方がきわめて偏っている
- d 物事の眼目となるところがわかっていない

三

次の文章を読んで後の間に答えよ。なおこの文章の直前には、「作品が作者の意図を超えるのは、人生がそれを生きる人間の意図を超えるのと同じであ」と記されている。

人は自分の人生を生きるということになっているが、意図通りにはではない。人生そのものが文学のかたちをしているのであつて、これは言語を獲得した人間の宿命であるというほかない。歴史も文学であり、伝記も文学である。史料の物質性に規定されるが、それはしかし、その規定のされ方においてすでに文学なのだ。この事情は、史料の物質性の一例として、たとえば写真というものの用いられ方ひとつを考えるだけでもすぐに分かる。写真は光学現象にすぎないが、人はさまざまな写真のなかから文脈にふさわしいものを選ぶのである。

フィクションとノンフィクションの関係を誤解してはならない。ノンフィクション(実話||事実)がフィクション(話||虚構)の後に成立したことはその語の成り立ちから明らかである。事実があつて虚構があるのではない。虚構があつてしかる後に事実があるのだ。事実なるものは虚構の後に——つまり語ること書くことその後——あらためて発見され意識されたのであつて、あえていえばそれは虚構の虚構なのである。

この虚構の虚構を科学と言つても誤りではない。それはこの世界に拮抗すべく精緻化された虚構なのだ。科学と詩と宗教が同じ場所に棲む理由にほかならない。

だが、ここで熟慮されなければならないのは、文学的感動と宗教的感動とは別のものではないということ、虚構と事実は別なものではないということではない。そうではなく、この問題がなぜ、たとえば小林にとつて観法の問題として登場したかということであり、あるいは小西にとつて、俊成や定家が摩訶止観の、西行が密教の、芭蕉が禅の問題として、すなわちいずれも見るこの問題として登場したかということである。

言語にとつては見るものが特別な位置にあるからである、と、私には思える。

聞くことも重大だが、言語においては、それはあくまでも見るこの系として展開しているように思える。

見ることが人間にとって特別なのは、人間はなぜか、見ているその対象にやすやすと自己同一化することができるからである。このことはたとえば野球観戦ひとつに明らかである。数千人の観衆が投手と打者の一挙手一投足に瞬間的にどよめくのは、観衆が投手や打者に同一化しているからにはかならない。相撲を観戦して手に汗握るのもそうだ。舞台芸術にいたっては、観客を引き込んで自身に同一化させる役者や踊り手こそが名人なのである。芝居小屋を出て役者の仕草を真似、声色を真似る客が多ければ、それは成功した芝居なのだ。

人はどのようにして相手の身になることができるようになったのか。もちろん、母を見習うことによってである。人は、自分の身になって世話してくれる母を見習うことによって自分なるものを形成するのであって、これは要するに他者として対面することによってはじめて自己を見出すということ、つまり他者として自己を見出すということである。その媒介として離乳期以後、人形や自動車などの玩具が用いられることはよく知られている。

人は他者として見出された自己を自己として引き受けるのである。思索の起源は自己にあるのではない。かりに自己であるとすれば、それはすでに他者によって媒介された自己なのだ。思索の出発点を自己に置くことはしたがって致命的な誤りであることになる。

相手の身になることができるということの帰結のひとつは、人は誰にでも何にでも成り替わることができるということである。動物にも植物にも成り替わることができる。海にも山にも成り替わることができる。だから人は、たとえば木に向かって誓い、あるいは雲に向かって嘆くのである。さらには明日の、一年後の、十年後の自己に成り替わることまでできる。これは想像力の問題ではない。日常要求される気づきの問題である。この能力がなければ人間としてやっていけないのだ。

奇異なことではない。この能力がなければゲームなどできるはずがない。投手も野手も交替できなければゲームは成立しない。この場合、ゲームとは社会の別名である。盤上遊戯が面白いのは、盤面を正反対にできる、つまり相手の身になることができるからである。

意識的に相手を苦しめることができるのは、じつは相手の身になることができるからなのだという逆説もこうして登場す

る。苦痛は動物の特権だと述べたのはヘーゲルだが、残酷は人間の特権だといわなければならない。犬も猫も猿も残酷ではない。サディズムもマゾヒズムも人間の問題、言語の問題なのだ。

だが、ここで登場するさらに重要な帰結は、相手の身になることができるようになるのとまったく同じ瞬間に、人は、相手と自分の双方を眺めうる視点を獲得するようになるのだということである。それがなければ入れ替われないのだ。

つまり、⁴世界を俯瞰する視点である。

野球ならば監督の視点である。世阿弥ならば離見の見とでもいうべきところだが、原理的にはおそらく斜め上の視点から眺めることができるようになった。臨死体験のいわゆる魂の位置に立つようになった。魂になって、真上から自分の死体とそれを取り囲む人々を眺め下していたという臨死体験が引きも切らないのは、何のことはない、人間はすべてつねにそういう視点をはじめから確保しているからにほかならない。

言語は相手の身になることができなければ成立しない。向き合った人間と、瞬間的に互いに向きを変え位置を変えることができるようにならないければ成立しないのである。これは、言語をして世界を捉えるための恣意的な網目と考えるソシュールの考え方の、あるいは、人間はすべて普遍文法を備えて生まれてくるとするチョムスキーの考え方の、そのまたさらに前提になるはずの問題である。なぜなら、相手の身になるということは、言語以前の現象として動物の世界に広く見られるからである。言語はその能力を対象化することによって——つまり物質化し象徴化し記号化することによって——ほんらいは適用されないところまでその機能を拡げてしまったにすぎない。

肉食動物が草食動物を追うとき、追う方は追われる方の身になり、追われる方は追う方の身になっている。鷹が兔を追うさまを想像するがいい。ほとんど芸術的な劇が展開されている。だがおそらく、人間以外の動物にあつては、この能力は対象化されてはいないのである。つまり、ただ純粹に他人に成り替わるためにのみ他人に成り替わり、ただ純粹に俯瞰するためにのみ俯瞰することは人間だけしかないのだ。憑依し、その憑依を俯瞰して楽しむこと——要するに劇と舞踊と物語——は、人間だけしかないのである。

〔注〕小林…小林秀雄。批評家。 小西…小西甚一。日本文学研究者。 摩訶止観…六世紀の仏書。 サディズム…他者を虐げ

ることを楽しむ傾向。 マゾヒズム…他者によって虐げられることに快楽を覚える傾向。 ソシユール…言語学者(一八

五七—一九一三)。 チョムスキー…言語学者(一九二八—)。

問一 傍線部1のように筆者が主張する理由はどのようなものか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 史料はその扱われ方自体において文学と同様の性質を帯びているから。
- b 史料は文学と同じく高度に修辭的な表現の産物であるから。
- c 史料にはその作成者が書きたかったことが書かれておらず、その点で文学と似ているから。
- d 史料は文学作品と同様につねに災害などによって消失の危険にさらされているから。

問二 傍線部2はどういうことか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a まず物語作品が作り手の努力によって精緻化され、その精緻化の技術が次にノンフィクションに活かされるということ。
- b まず語り、書くという営みが存在し、その上で事実なるものが認識されるということ。
- c まず小説のようなフィクションが執筆され、その表現を踏まえつつノンフィクションが執筆されるということ。
- d まず語り、書くという営みが事実の認識を深め、さらに後続の語り、書くという営みはその認識をより深化させるといふこと。

問三 傍線部3の能力について筆者はどのように考えているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a この能力のために、人間の社会において意識的に相手を苦しめるような行為は見られない。
- b この能力はスポーツ観戦、舞台芸術、芝居小屋という限定的な場面で用いられる。
- c この能力は、自分を世話してくれる母との関係の中で、他者として自己を見出すという過程を経て獲得される。
- d この能力の性質がどのようなものかを説明するのが、苦痛は動物の特権だというヘーゲルの言葉である。

問四 傍線部4の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 人が相手と自分を同時に眺めうる視点を指しており、これはとくに指導者の職にある人間に備わっている。
- b 人が相手と自分を同時に眺めうる視点を指しており、これは指導者の職にあるか否かとは無関係に人に備わっている。
- c 人が遠方から大勢の人々の動きを察知できる視点を指しており、これはとくに指導者の職にある人間に備わっている。
- d 人が遠方から大勢の人々の動きを察知できる視点を指しており、これは指導者の職にあるか否かとは無関係に人に備わっている。

問五 傍線部5について、言語が「その能力を対象化する」ことで人間がどのようになったと筆者は考えているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 肉食動物が草食動物を追うときにこの草食動物の身になるように、他者と同一化しつつ行動するようになった。
- b 劇という営みに象徴されるように、他人に成り替わること自体を楽しむようになった。
- c 鷹が兎を追う様子がほとんど芸術的な劇として展開するように、他者の行動を踏まえつつ自己の行動を秩序づけることができるようになった。
- d 舞踏という営みに体现されるように、身体動作を芸術的な劇そのもののように美しく整えることができるようになった。

問六 本文の内容に合致するものを次の中から一つ選べ。

- a 科学は語ることを書くこととは無関係に発生した営みであり、その点で詩と宗教から区別されねばならない。
- b 動物は母を見習うことで自分を形成することはなく、そのため相手の身になりながら行動することもない。
- c 人も動物も相手の身になりながら行動することができる、他者に成り替わることそのものを楽しむ。
- d 相手の身になることができるという人の能力ゆえに人は盤上遊戯を楽しむことができる。

問七 二重傍線部「小林」(小林秀雄)の評論(著書)を次の中から一つ選べ。

- a 様々なる意匠
- b 愛と認識との出発
- c 自然主義盛衰史
- d 言語にとって美とはなにか

